河村目呂二の縁福猫が招いた縁と福

―原祥子さん、そして河村目呂二の初代縁福猫（「芸者招き猫」）との出会い―

則武　広和

（Ｉ）きっかけはＥテレ番組「趣味ドキッ！　不思議な猫世界」

平成も終わりを迎えようする２０１９年２月４日「立春大吉」の午後、一通の手紙が届いた。差出人はNHKのＥテレ「趣味ドキッ」の担当ディレクター氏。実は前年の１１月から、同番組で「不思議な猫世界　ニッポン　猫と人の文化史」という全７回のシリーズが企画され、その第４回「幸せを運ぶ猫」に「招き猫コレクター」の肩書で講師として出演する機会を得ていた。開封すると、中に更にもう一通の手紙。こちらの差出人は「原祥子」と記してあった。中を開いて、その文面と一緒に添えられていた資料、絵葉書を見て驚いた。

なんと！河村目呂二作「芸者招き猫」の見事なカラー写真の絵葉書、クレジットは「個人蔵」。発行元は猫専門画廊「ボザール・ミュー」で、オーナーは宮地延江さん。１９８４年に日本で最初の猫専門画廊として銀座に誕生し、数々の猫アーティスト達を紹介して来られたが、２０１３年に惜しまれつつも閉廊となった、知る人ぞ知る伝説の画廊である。

お手紙を読み、差出人の原祥子さんのご尊父杵屋栄左衛門（1894～1982）氏がかつて愛蔵していた「芸者招き猫」の写真絵葉書であることがわかった。

―杵屋栄左衛門、本名は原省三（はら　せいぞう）。歌舞伎長唄の第一人者で重要無形文化財保持者（人間国宝）。黒御簾（くろみす）音楽を五線譜で整理した「歌舞伎音楽集成（江戸編・上方編）」は今も国内外で高く評価されている。幅広い趣味と旺盛な研究意欲の持ち主で、シャネルの５番を愛用する洒落者としても知られた。―

（「２０世紀日本人名事典」より一部要約抜粋）

私はまず、「五線譜で整理した」という事典の記述に驚いた。既成の固定観念にとらわれない姿勢、日本の伝統芸能についてグローバルな普及や保存に努めようとする強い意思を感じたからである。

さて、絵葉書に載った「芸者招き猫」は、栄左衛門氏が昭和８年に直接購入し、没後は、祥子さんのご母堂（栄左衛門氏の奥様）である杵屋栄禧（えいよし）氏が大切に自宅で飾っ

ていたとのことである。ちなみに栄禧氏も長唄三味線方では高名な方で、昨年３月に１０４歳で天寿を全うされた。邦楽の友「四季随想」のコーナーに長年執筆し、長唄界の「随筆の第一人者」と評されているそうだ。

祥子さんのお手紙には、栄禧氏も亡くなり、ご自身の年齢も考え合わせて「目呂二の猫の行く末を案じて」いたところ、番組を観て「可愛がって下さる方がいらっしゃればお譲りしたく」というお気持ちが記されていた。早速、返信を差し上げたところ話はとんとん拍子で纏まり、「猫の日」の「２月２２日」を目前に控えた２月１８日、私が上京し直接お会いして譲り受けるという望外のご縁を得たものである。

我が家に嫁いだ原家旧蔵の初代縁福猫（「芸者招き猫」）
＊座布団も原家旧蔵品

（Ⅱ）原祥子さんのこと

２月１８日の午後、日本橋の三越前で待ち合わせた私は、たいへん緊張していた。ご両親の華々しい経歴のみならず、祥子さんご自身もかつて NHK の文芸部に在籍され（当時の部長は後に NHK 会長を務めた坂本朝一氏）、その家柄と仕事柄から伝統芸能関係者をはじめ文化人との交友もさかん、私とは俗にいう「住む世界が違う」という先入観を正直抱いていたからである。直前のメールには「お目もじの上、楽しみにしております」という言葉をい

ただき、恥ずかしい話だが、「お目もじ」という言葉を初めて知った。さらにアドレスで気になるワードがあったので調べたらフランス語で「猫」を表すワードであった。というわけで、今となってはたいへん失礼な先入観であったが、「もし気難しい方だったらどうしよう」という一抹の不安もあった。

共通点といえば、お互いに「猫を飼っている」ことと、初心者ながら私も歌舞伎鑑賞は好きであること。猫飼いについて正確に記せば、祥子さんはかつて「１ダース」（１２匹）の猫を飼っていたが、最後の愛猫を看取った後は自身の年齢もあって飼っていないとのことである。お会いした時は、胸元を飾るカメオの猫顔ペンダントがさりげなく上品で素敵だった。お聞きしたら、ある作家の個展で、ペンダントに彫られた猫の顔が当時の飼い猫「リョウ」に似ていたので買い求めたそうである。「リョウ」とは、この猫で飼うのを「終了」にしようという決意？から名付けられた。私はその話を聞いて、かつて産まれた子に「留子」「留吉」という漢字を使った昔ながらの文化を想起した。ペンダントの裏には「ryou」と記してあった。買い求めた際にいきさつを知った作家氏が、特別に記してくれたそうである。

話は前後してしまった。初めてお目にかかって数分後、それまで私の抱いていた偏狭な先入観、一抹の不安は吹き飛んだ。私から評するのも僭越・失礼この上ないことだが、祥子さんは上品な雰囲気を漂わせるだけでなく、穏やかで気さくなお人柄が伝わる素敵な女性であった。さらに、お話の内容が私にとってたいへん貴重で、かつユーモアいっぱい楽しいのである。ご両親のエピソード、ご自身の NHK 在籍時代、テレビ放送草創期のエピソード、どれもが興味深い。例えば、アメリカポップス界の大スター、ポールアンカが初来日にした際、栄左衛門さんは、一も二もなく奥様と祥子さんを連れて公演を聴きにいったというお話、祥子さん曰く「父はどんな分野でも一流のホンモノを体験させたいと考えていたと思います」とのこと。また、お母さまのエピソードでは、NHK 局内で呼び出し放送がかかった際、ご自分が呼ばれたにもかかわらず、「えいよし」を「栄養士」と聞こえたらしくご自分の事と気づかなかったという爆笑するようなお話。

気が付けば 3 時間半という時間があっという間に過ぎていた。私の帰りの新幹線の時間もあって、なごり惜しくも話はお開きとなった。私の勝手な思いだが、祥子さんには是非、ご両親やご自身のエピソード、思い出を記録にして残し、私家版でもよいので書籍化してほしいと願ってやまない。

（Ⅲ）原家愛蔵の初代縁福猫（「芸者招き猫」）

今回のご縁を通して、祥子さんからいただいた資料やお話を基に、いくつか記したい。まずは、杵屋栄禧氏が「邦楽の友」に掲載された随筆「四季随想（３４８）」の「招き猫」という一文の主要部分を紹介する。

―大分以前の話になるが、東京都の広報誌に、私が写真一頁入りで紹介されたことがある。その時偶然に、亡き夫が大事にしていた、高さ三十センチ位の招き猫が写った。すると一面識もなかったのだけれど、岡本文弥師から「目呂二をお持ちとはうらやましい」というお便りを頂いた。亡夫が大事にしていたことは分かっているのだが、誰の作だかは聞いていたかもしれないが忘れていた。それが文弥師によると、目呂二という人の作だというのである。そういえば亡夫がこの招き猫は自分が芸者、東郷元帥が娘の招き猫を河村目呂二から買い求めた（注１）、ということを聞いたことを思い出した。文弥師のおかげでやっと作者もわかり、それから文弥師が亡くなるまで文通が続いた。―

この文に続いては、娘（祥子さん）が猫専門画廊「ボザール・ミュー」を訪れた際、オーナーの宮地さんと招き猫の話題になって、見事な「芸者招き猫」が原家に所蔵されていることを宮地さんが知ったこと、その宮地さんの提案もあって所蔵者を明かさないという条件で写真絵葉書が発行されたこと、栄禧氏自身もその後目呂二についていろいろ調べたことが述べられている。

私は十年以上前、「名前は明かせないが都内在住のある方が、とても状態のよい芸者招き猫を所蔵している」と宮地さんが言っていたという伝聞の記憶を思い出した。その「芸者招き猫」こそ、原家所蔵のものだったのだ。

さて、「芸者招き猫」は昭和 8 年に注文製作をもとに頒布されたのであるが、当時の諸資料（広告用のチラシ等）から、頒布時の正式名称は「縁福猫」であることがわかっている。「芸者招き猫」という呼び名は、今までその姿形から、後年誰ともなく言われてきたことが定着していったのではないかと推測されてきた。

ところが今回の記述によって、頒布時の正式名は「縁福猫」でも、その当時から目呂二自身も含めて「芸者」「芸者猫」「芸者招き猫」等、「芸者」という言葉が通称として使われていた可能性が指摘できる。

ところで祥子さんによれば、栄左衛門氏は「猫モノの蒐集家」ではなく、自宅にあった猫の置物もこの「芸者招き猫」だけであったという。

羽織を着た娘という擬人化された招き猫はたいへん珍しい。おそらく土人形の招き猫としては初めて登場したのではないだろうか。但し、立体造形物ではないが、目呂二の製作による頒布会「趣味の猫百種」が昭和 3 年に無事完結した際、記念の特別付録として鍋蓋が配られており、その鍋蓋には羽織姿で微笑みながら手招きする娘の擬人化猫が描かれ、傍らに目呂二自身の筆で「満音喜猫」と揮毫されている。

さらに遡ってみると、明治 33 年には東京で、清元「万年喜猫」が初披露され、その舞踊

の中では着物姿の女性が猫の手招きをする所作もあった。この清元「万年喜猫」は、その後今日まで続いており、時々披露されてきている（注２）。目呂二も当然この清元を知っていたことであろう。また、目呂二は、羽織を着た土人形の招き猫として、大阪住吉の「初辰さん」こと「初辰猫」も知っていた。このような既有知識を土台に、目呂二は「芸者姿」で手招きする娘の擬人化招き猫を創作したのでないだろうか。当時、土人形の招き猫を雄雌区別して製作することはなかったことを思うと、目呂二の「芸者招き猫」の独創性がよくわかる（注３）。

ところで「羽織を着た娘の招き猫―芸者猫―三味線―長唄の師匠というような繋がりから、父（栄左衛門氏）は『芸者招き猫』に興味をもって購入したのではないか」と祥子さんは推測していた。私も同感である。

さらに加えて私はこう思う。

栄左衛門氏は、歌舞伎音楽を五線譜に採って残すという、それまでの固定観念にとらわれない画期的な業績を残され、柔軟で広い視野と自分の信念を貫く意思とを持ち合わせた方だった。目呂二も、専門分野は彫塑であったが、それまでの官展主導の世界にとらわれない自分の表現を求めて美術団体「構造社」に参加した。目呂二と直接交友のあった岡本文弥も、新内節の世界で古典の保存に努める一方、新作にも精力的に取り組み、一時期は「左翼新内」と呼ばれたこともある人物だったようだ。他にも目呂二の交友関係は幅広く、その中には自由律の俳人、荻原井泉水もいた。目呂二、岡本文弥、荻原井泉水、彼らには、それまでの固定観念にとらわれない自分の表現を求めるという共通点が浮かび上がる。栄左衛門氏もそのような目呂二や彼を取り巻く仲間たちの姿勢に共感をもっていたからこそ、猫モノ好きではなくても、会場で「芸者招き猫」を購入し、自宅に連れて帰ったのではないだろうか。

祥子さんによれば、栄左衛門氏はどの分野にせよ「本物」に触れることを大切にしていたそうである。栄左衛門氏にとって目呂二の「芸者招き猫」は、郷土玩具、民芸品としての大量生産された招き猫を超える、アートとして優れて「ホンモノ」の創作招き猫だったのではないだろうか。目呂二―岡本文弥―杵屋栄左衛門、固定観念にとらわれずに「ホンモノ」の表現を追求する人々の奇縁を感じるのは、私だけではないだろう。

（Ⅳ）初代縁福猫の底部をめぐって

初代縁福猫のオリジナルが今日まで残っていることは極めた稀である。愛好家の間でも数体の現存が知られている程度である。多くは先の戦争で焼失してしまったようだ。したがって初代縁福猫の底部については不明な点も少なくない。そこで、ここでは、手元に来た原家旧蔵の初代縁福猫の底部について、いくつかの所見を記したい。

戦後間もない昭和 25 年頃に頒布された二代目と三代目の縁福猫の底部には、「猫珍奇林（みょうちきりん）」という漢字名が手書きで、その傍らに猫の肉球を模したデザインの落款印が絵描かれている。ところが初代の底部にはそのような落款印は描かれていない。

原家旧蔵の初代縁福猫の底部（左）と二代目縁福猫の底部（右）

このことについて、ある愛好家は、目呂二に関する展示会場で観た初代縁福猫を基に、彼の HP で次のように記述している。

―今回飛び入りの痴娯の家タイプ（＊初代縁福猫のこと）は底書きがない。しかも花巻人形のように紙が貼ってある。しかし戦後の自性院タイプ（＊二代目縁福猫）およびそれと同等と考えられる縁福猫は底が閉じており、製法が明らかに異なる。また「猫珍奇林」とねこの足跡がある。―

さらに、同 HP では、かつて新潟県柏崎のコレクションヴィレッジ「痴娯の家」で展示されていた故岩下庄司氏旧蔵の初代縁福猫が、数年前にオークションに出された際に出品者の許可を得て、詳細に画像掲載されている（現在は落札した愛好家が所蔵）。その画像では底部の縁に「みょうちきりん」とひらかなで陽刻した落款印があることが確認できる。

（HP「ねこれくと」内の「目呂二ミュージアム」より一部抜粋）

（＊）は筆者

今回、原家旧蔵の初代縁福猫（「芸者招き猫」）の底部を手に取って観ると次のようなことがわかった。

①成型は、伝統的な土人形の成型方法である「型押し」であろう。
②底部は、先の愛好家の見解と同じく、郷土人形の花巻人形と同じ製法。
　すなわち、「型押し」してよく乾燥させた後、素焼きし、その後底部に紙を貼る。次に底部も含めて土人形全体に胡粉（貝殻を原料とした白い顔料）で白く塗り、乾燥後磨き上げる。その後に泥絵の具を使って着色。
③陶土の底部の縁には、直径 5 ミリ位の肉球をデザインしたような刻印がある。

原家旧蔵の初代縁福猫の底部縁の肉球刻印（拡大写真）

　縁福猫の製作は、目呂二の娘さんにあたる清原ソロさんの証言から、目呂二が原型を作り、そこから型取りして成型したものを素焼きにして、一点一点手彩色したようだ。その彩色は目呂二と妻であるスノ子さん、加えて夫妻の後輩にあたる東京美術学校・女子美の学生が（彩色を）手伝いに来ていたこともあったという（前出 HP「ねこれくと」から要約)。このことから考えると、着物柄の彩色の違いだけでなく、底部の落款印も複数あったことも十分納得できる。目呂二は猫愛に満ちた遊び心いっぱいの芸術家であったから、「みょうちきりん」や肉球印など複数の印を作って押印し、製作そのものを皆で楽しんだのではないだろうか。

V）おわりに

　既に所蔵していた二代目縁福猫が私のコレクション Best 3 のひとつとして TV で紹介されたことが縁となって、招き猫愛好家の間で「幻の芸者招き猫」と言われてきた初代縁福猫の所蔵者、原祥子さんとご縁ができ、その上に愛蔵品を譲り受けるという望外の福を得た。「縁福猫」は文字通り私に貴重な「縁」と「福」を招いたのである。

このことを私の秘蔵とするのではなく、是非、経緯も含めて記録として残し公開したいと考えてまとめた次第である。目呂二研究者や招き猫愛好家にとって、何かしら今後の検討の材料になれば幸いである。

（のりたけ　ひろかず）

（注１）　祥子さんから後日いただいた手紙には、次のような所感があった。
―父によると東郷様が「ウチには芸者は向かないので、娘がいいとおっしゃった」と言っておりましたので、あるいは記録はなくても東郷様の為に特別に 1 体作ったとも考えられるのではないでしょうか。―

（注２）　長唄にも、一曲だけ「臥猫」という秘曲がある。成立は江戸時代の明和年間（1760 年代）と推定されている（原祥子さんよりご教示）。
　さらに遡ると、元禄年間（1690 年代）には、水木辰之助が「から猫の所作事」を演じて評判となっている。

（注３）　幕末に土人形の招き猫が誕生して以降、近年のモノを除いて、土人形としての招き猫が雄雌を区別して製作された例を私は知らない。一方、古くから遊郭の女性が「寝る子」から転じて「猫」に例えられてきたことはよく知られている。

＊　本稿の中で、旧蔵者である原家に関する記述は、原祥子さんのご承諾をいただいて今回公開している。資料をご提供くださり、公開をご承諾いただい原祥子さんに謝意を表したい。